

合に存するかなどを検査によって知っておくことは有意義である。あまり極端な特徴は矯正するようにつとめるよすがとなるし、自己の行動を必然と肯定するに役立つこともある。

また、現在フィルムは相当普及しているが、これが自由に使用できるようになり、教育の場における姿を映してみることができようになったら、自分の理解は大いに広げられるだろう。特に幼稚園や小学校低学年の教師は皆これをやりたい。相手とむきあっているときの姿勢が適当であるか、どんな表情をのぞかせるかなどについて、自分だけでは自分のことをあまりに知らなすぎる。すべての教師がフィルムによって自分の姿を眺め、テープレコーダーも盛んに使用し、正しい仕方によって自分らを分析研究したら、教育の場はその後相当に変化すると想像される。

教師が自分自身を理解するについて、自分の行動を理由づけることの大切であるこ

とと、客観的に自分を知る方法の二、三を述べた。前のことと、後のこととはいささか次元を異にするものではあるが、二つとも最も重要な事柄なので、ならべて挙げてみたのである。

二子幼稚園

河尻朋子

教師の生活も、馴れきってしまうと、知らず知らずのうちに型にはまったものになり、型から自分をはずして眺めることが困難になってきます。自分のしていることは、ほんとうに子どものためになっているでしょうか。子どもの自発性を妨げないようにと、そればかり頭にあって、いつの間にか子どもにひきずられていたり、あれこれと「きまり」を守らせることにとらわれて、知らぬ間に、のぼしてやらなければならない

らない芽をふみにじっていたりすることはないでしょうか。私は、過去二年をふり返ってみて、ある時は目標にとらわれ、自分ばかり先を急いで子どもたちとの隔りにも気づかなかつたことを思い、ある時は子どもたちに先を越され、追いつこうとして息を切らしたことを思い、子どもたちと共に歩くことのむずかしさを、今さらのように感じています。子どもと共に歩こうとすれば、教師は、子どもの心の動きをしっかりとらえていなければならないと同時に、自分自身が目標に向かって何をなすべきかを理解しておかけなければならないでしょう。教師は、子どもといっしょに遊んだり仕事をしたり、どんなに子どもの近くにいっても子どもの心の動きには敏感であり、冷静な判断をくだすことができます。しかし、自分自身に目を向けた時、自分の心はとらえがたく、どうすればよいかと思ひ迷うことも出てくるでしょう。ある子どもについても知りたいと思えば、その子どもについての

観察記録、各種のテストの結果、家庭調査など、多くの客観的な資料を集めることができますし、必要とあれば、親との話し合い、児童相談に当たっている人々の意見をきくなど、いろいろな方法が考えられます。

また、現場の教師でも、馴れてくれば、表情や行動をちょっと観察しただけで、ある程度その子どもを理解することができます。ところが、教師が自分を理解しよう、客観的にとらえようとしても、子どもの場合のような資料を自分で集めるわけにはいきませんし、また、つねにだれかに観察批判してもらうわけにもいきません。どうすれば自分を客観的にとらえ、自分自身を理解することができるでしょう。私は、それを二つの場合に分けて考えてみたいと思います。一つは現場について自分自身を理解すること、他の一つは現場から離れていて自分を理解することです。

① 現場で自分自身を理解すること

現場で子どもといっしょに動いている時

には、子どもに目を奪われて、目標がこういうことで、そのためにこうしているのだ、こうすべきだというようなことを絶えず考えている心のゆとりは、なかなか出てこないものです。この場合にはこうしたければならない、こうすべきだと信じて、ともかく子どもをその通りにさせようとします。子どもがその通りにならないとき、むりな要求をしているわけではないのにと、勝手な行動に出る子どもたちをうらめしく思ったりします。方法が悪かったのか、そうさせようとしたこと自体が間違っていたのか、それとも両方なのでしょう。子どもたちにとって紙芝居やスライドほどには面白くない「生活発表」など、一人の子どもが二言三言しかしゃべらなくても、ぐずぐずしている子どものために手間どって、ひとまわりするのに十分近くもかかってしまつと、終りごろには子どもが飽きて全体がざわついて来ます。教師は「人の話を静かに聞く」という生活目標であるなら

ば、子どもたちに忍耐を教えこもうとするでしょう。しかし、相変らず子どもが落ちつかないとすれば、その原因を考えるでしょう。やり方が悪かったのか——たとえば、机の並べ方に配慮が足りなくて生活発表を楽しめるような雰囲気が出てこなかったとか、教師の話の運び方がまずかったというようなことはなかったでしょうか。それとも十分近くも静かにさせておこうとすること自体がむりではなかったか——たとえば、子どもたちを集める時間が早すぎ、遊び足りなくて不満のために、あるいは逆に遅すぎて遊び疲れているために、十分もの緊張の持続は望めないものか——もしそうだとすれば、発表は子どもの半数にとどめて残りは次の週にするという約束で、話の時間を短くするというようなことを考えるべきでしょう。教師にこのような反省を促してくれるものは何であるかといえば、それは子どもたちの表情であり行動なので。子どもたちは、相手が先生だか

らといって、自分の感情をおもてに出すまいと心の中に押しつつむようなことはしません。自分の友だちに対すると同じように先生に対しても、喜び、悲しみ、怒り、不満などを卒直に表わすでしょう。教師は、ある子どもが他の子どもに対して怒りや悲しみをことばや行動で訴えている時、その子どもの心を理解しようと努め、両方の子どもにどんな取り扱いをしてやったらよいか冷静に見きわめることができます。それと同じように、教師は、子どもの自分に対するいろいろな形の訴えを通して、子どもに対する扱い方が誤っていないかどうかをすばやく読みとることによって、ある程度自分を客観的にとらえることができるのではないでしょう。私には、子どもを理解することが、自分自身を理解しようとすることに深いつながりを持っているように思われるのです。

② 現場を離れていて自分自身を理解すること

子どもから離れて自分自身を理解しようとする場合には、教育の内容あるいは技術についての研究、教育者についての研究など、今までになされている多くの研究の結果が何よりも役立つと思います。これらは、一人の教師について、一人の子どもについての観察記録、テストの結果などのような客観性は持たないかも知れませんが、教師が自分の技術、内容をよりよいものにしていく上に、貴重な資料となるでしょう。現場では、絶えず子どもと共に動きながら子供の表情や行動を通して自分をとらえようとするのですから、そのとらえ方もその場その場の一時的なものになってしまひ、自分の向かっている先を見通し、現在から未来へまたがっている長い時間の中で自分をとらえることは不可能に近いのです。ところが教育の技術・内容についての研究の結果は、教師が自分の出方に対する子どもの動きを予知し、時と場合に応じて最もよい教育内容・技術を選ぶ洞察力を教

師に与えてくれることによって、教師に現在から未来へつながる時間の中で自分をとらえさせてくれます。①にあげた「生活発表」の例を考えてみると、ながい時間子どもを静かにさせておくこと自体がむりなのか、それとも、ただやり方が悪かっただけなのかというようなことは、子どもの表情・行動を通して反省するのではなく、ことにおつかる前に、時と場合によって起り得るあらゆる子どもの状態を思い浮かべ、それらに対するあらゆる方法をあらかじめ考へておくべきなのでしょう。一の、子どもを理解することから教師が自分自身を理解しようとするのを消極的な理解の仕方とすれば、二の、教師が自分をとらえ、自分自身を理解してから子どもたちも理解しようとするのは積極的な理解の仕方といえるでしょう。

また、子どもから離れて一人でいると、子どもたちといっしょに動いている時には気づかなかつた、小さな、しかしおろそか

にはできない事柄に思い当ることがあります。教育の技術・内容については気を配っていても、子どもに接するときのちょっとしたことは使い、言い方など気に止めないことが多いものです。教育者の態度の子どもに及ぼす影響、好ましい教師はどんな性格的要素をもっているかというような研究は、自分の性格に対する反省を促してくれます。教師が神経質であれば子どもも神経質になるでしょうし、教師がいつも必要以上に大きな声で話していると、子どもたちも大きな声でしゃべることを何とも思わなくなってしまうでしょう。教師は、子どもたちへの影響を考えて、自分の性格についても常に細かい注意を忘れてはならないと思います。

以上、教育の領域のなかで、教師が自身自身を理解するにはどうすればよいかを考えてきたわけですが、教師も社会の一員である以上、教育の領域を越えたもっと大きな複雑な一般社会の中で、自分自身を理解

することも考えなければなりません。教師は教育の面で専門家でありさえすればいいのではなく、円満な人格と広い視野をもった立派な社会人であるべきだと思います。それには、教育以外の仕事にたず

実際保育の場で 子どもを理解するには

市川学園

宇田川照子

桜のつばみがふくらみ、愛らしい小鳥の

唄声が聞える頃になって、新しい子どもたちを幼稚園に迎えると、早く一人一人を理解して、その子その子に適切な指導をした

い、と誰でも思うことでしょう。

子どもを理解する方法は種々ありますが、実際保育に当たっている私は、次のようなことを手がかりにして、子どもを理解す

さわっている人々とも意見を交換し、あらゆる角度から教師としての自分を眺め、社会人として不具にならないよう努めていかなければならないと思います。

るようにつとめています。

○入園前に行う面接

私の園では、毎年一月の下旬頃、新しく入園する子どもと母親に面接します。それは、子どもを選衡するためでなく、子どもと親しみ、子どもを理解するためです。保育室に母と子と一緒にはいり、一つ机に子どもと教師と向かい合い、他の机に母親と